

アーツカウンシル新潟

令和7年度
文化芸術活動に関する支援事業
取り組みレポート



アーツカウンシル新潟について	…………… 2
支援事業について	…………… 2
説明・相談会および報告会等実施状況	…………… 3

【 取り組みレポート 】

新プロジェクトへのチャレンジ助成	
小学生の地域プロジェクト&デザインチャレンジ	…………… 6
グラレコで描き、次世代へ伝える「新潟の伝統文化・芸能」インタビュー&パネル展	…………… 7
ちょっといきなり本読み！in新潟	
ちょっといきなり本読み！ファシリテーター養成講座	…………… 8
岩室AIRプロジェクト2025	…………… 9

テーマ別プロジェクト助成

[地域文化の魅力を創造・発信する取り組み]	
秋葉山AIRの実施 # にいつ昔話 (旧 D-gift)	……………12
第6回秋のときめきコンサート	……………13
[文化芸術で子ども・青少年を育成する取り組み]	
幼児教育を学ぶ学生と共に考える「絵本の世界」へのアプローチにより、 子どものダンスへの興味・関心を深める	……………14
子どもに「生の演劇」を届ける人材育成プログラム	……………15
「放課後デザイン」の普及プロジェクト (放課後デザインフェス)	……………16
HomeShip vol.2	……………17
[文化芸術と他分野とが連携する取り組み]	
第三回 響きと人々 古澤史水・巫美麗二人会「貌」一義と情のあわいにて一	……………18
イベント「MORRY GO ROUND」の開催	……………19
『目で楽しむお笑いライブ』	……………20

【 資料編 】

令和7年度 文化芸術活動に関する支援事業 募集要領 (概要)	……………22
--------------------------------	---------

アーツカウンシル新潟について

新潟市民の文化芸術活動の活性化を図るとともに、持続的な文化創造交流都市の推進体制を構築することを目的に、公益財団法人新潟市芸術文化振興財団事務局内に2016年9月26日に設立されました。

文化芸術をきっかけに新潟のまちや地域が創造的に持続すること、発展していくことをめざして、支援や取り組みを行っています。



支援事業について

アーツカウンシル新潟では、「文化芸術活動に関する支援事業」として、新潟市内で取り組まれる文化芸術活動に対して伴走支援・助成を行っています。

「文化芸術活動に関する支援事業」は、初めて文化芸術活動に取り組む団体や、活動実績のある団体が新たに挑戦するプロジェクトで広く開かれた取り組み（「新プロジェクトへのチャレンジ助成」）、＜地域文化の魅力を創造・発信する取り組み＞＜文化芸術で子ども・青少年を育成する取り組み＞＜文化芸術と他分野とが連携する取り組み＞のいずれかのテーマに合致する取り組み（「テーマ別プロジェクト助成」）、団体が抱えている課題や新たな枠組みへのチャレンジに対する取り組み、個人による新たな文化芸術団体の設立などの取り組み（「団体助成」）を公募しました。

この支援事業の特徴は、資金的支援に加え、「伴走支援」を実施している点です。事業を実施されるみなさまと丁寧にコミュニケーションを重ねながら、よりよい事業展開を一緒に模索したり、事業実施に関連する施設や団体等と橋渡しをしたり、取り組みの状況に応じた支援を実施してきました。令和7年申請受付分からは、本支援制度の趣旨をよりご理解いただくために、申請にあたり「事前相談」を必須とする変更を加えました。

令和7年度は17件の応募があり、そのうち13件を採択しました。今年度の特徴は、昨年度やこれまでの活動内容をふまえて、自団体だけでなく「誰かと一緒に考える・創る・取り組む」活動が多かったことにあります。どの事業の中にも、小・中・高校生や大学生などの世代、学校や大学などの教育・研究機関、地域で活動しているサークルやクラブ、自団体が従来から主軸とする分野とは異なるジャンルで活動している団体など、多世代や複数の団体、分野が交差し、協働する時間が積み重なっています。関係者・団体が多くなることで生まれる大変さもありましたが、事業の内面をより深く共有することで団体の応援者・理解者が増えるとともに、よい「共犯関係」（報告会で団体さんから出てきた言葉を使わせていただきました）が生まれていたようでした。6ページからはじまる「取り組みレポート」には、採択団体のみなさんの取り組み内容や活動に対する想いに加え、伴走してきたプログラムオフィサーのコメントも記載しています。令和7年度の採択団体のみなさんの、「共犯関係」から派生する新たな気付き、今後の展開にぜひご注目ください。

「いっしょに すこしずつ おもしろく」。これは、令和7年度からのアーツカウンシル新潟のキーメッセージです。令和6年度に実施した「採択事業報告会×“にいがた”を“ぶんか”で〇〇する作戦会議」では、ジャンルを超えた団体同士がつながるきっかけをつくることができました。そして、今年度は、支援事業採択団体のみなさんと歩みを共にさせていただくことで、アーツカウンシル新潟にいろいろな団体さんと視点を教えていただきました。取り組みの状況に応じた支援を行う「伴走支援」を当支援事業の特徴としていますが、それどころか、この支援事業を通して、みなさんから教えていただくことの方が多いと感じています。アーツカウンシル新潟は、文化芸術活動や文化芸術で新潟市やさまざまな分野が少しずつおもしろくなっていくことをめざしています。ぜひ、アーツカウンシル新潟に、みなさんの気付き、視点を教えてください。一緒に「文化芸術活動に関する支援事業」などを通して、「新潟が文化でこんなまちになるといいな」を形にしてけると嬉しいです。取り組みを企画されているみなさまからの申請、お待ちしております。

説明・相談会および報告会等実施状況

■令和7年度支援事業説明会

一部要件の変更など、支援制度全体の説明を実施。

実施日程：2025年2月1日（土）10:00～11:00

定員：20名

会場：アーツカウンシル新潟（新潟市中央区西堀前通六番町894番地1 西堀六番館ビル5階※）

■令和7年度支援事業申請個別相談会（第1回）

支援制度への申請に関する個別相談を実施。

実施日程：2025年2月15日（土）および16日（日）

定員：各回2団体（1団体45分）

会場：アーツカウンシル新潟（新潟市中央区西堀前通六番町894番地1 西堀六番館ビル5階※）

またはzoom（オンライン会議システム）

■令和7年度支援事業申請個別相談会（第2回）

支援制度への申請に関する個別相談を実施。

実施日程：2025年7月5日（土）、6日（日）、9日（水）、19日（土）、23日（水）

定員：各回2団体（1団体45分）

会場：アーツカウンシル新潟（新潟市中央区学校町通1番町12番地 市役所前ビル7階）

またはzoom（オンライン会議システム）

■プロジェクトのデザイン公開相談会（令和7年度“にいがた”を“ぶんか”で〇〇する作戦会議）

開催日：2025年6月4日（水）19:00～20:30

会場：上古町の百年長屋SAN（新潟市中央区古町通3番町653）

ナビゲーター：NEWGATE（迫一成さん、高橋徹さん、山下洋平さん）

プレゼンター：こはく会（渡辺美智子さん、佐藤陽子さん）

えちごインドサンガム（福井智美さん、羽倉美和さん、福井智弘さん）

主催：アーツカウンシル新潟

協力：NEWGATE

自身が文化芸術活動を実践していても、していなくても、文化や芸術を入口に、どんな「にいがた」になると楽しそうか、おもしろいかを出し合う場を創出することを目的に、令和5年度、令和6年度に続いて「作戦会議」を開催。令和7年度は「プロジェクトのデザイン公開相談会」として、「令和6年度文化芸術活動に関する支援事業」採択事業報告会をきっかけに団体同士の交流がはじまったこはく会とえちごインドサンガムの方々にご登壇いただきました。

アーカイブ記事はこちら> <https://artscouncil-niigata.jp/blog/8157/>



■「令和7年度文化芸術活動に関する支援事業」採択事業報告会&交流会

開催日：2026年3月7日（土）15:00～17:00（報告会）

17:00～18:00（交流会）

※開催実績：15:00～18:00 報告会

会場：上古町の百年長屋SAN 2階（新潟市中央区古町通3番町653）

令和7年度文化芸術活動に関する支援事業に採択された13団体のみなさんに集まっていただき、事業企画のきっかけ、事業内容や意図、事業を実施した手ごたえなどを、伴走したプログラムオフィサー（PO）がインタビューする形式で令和6年度に続いて開催しました。



※アーツカウンシル新潟住所は当時のもの

取り組みレポート

新プロジェクトへのチャレンジ助成

ちょっといきなり本読み！in新潟 ちょっといきなり本読み！ファシリテーター養成講座

令和6年度の実施内容は
こちら



団体名
Souer+



採択金額
160,000円（2年度目 助成率1/2）



会場
ちょっといきなり本読み！in新潟：SEIRANKAN(21日)、
Bar Book Box STORE(22日)、万代市民会館(23日)
ちょっといきなり本読み！ファシリテーター養成講座：
万代市民会館



開催日
ちょっといきなり本読み！in新潟：
2025年11月21日/22日/23日
ちょっといきなり本読み！ファシリテーター養成講座：
2025年11月23日

ちょっといきなり本読み！in新潟
出演：演出 岩井秀人（ハイバイ）、平石実希（22日11時回のみ）
参加者数：参加者（本読みをする人） 19人（4回合計）
見学者（本読みを見届ける人） 13人（4回合計）
ちょっといきなり本読み！ファシリテーター養成講座
出演：講師 岩井秀人（ハイバイ）
参加者数：受講者 2人、模擬本読み参加者 3人

1 ちょっといきなり本読み！in Bar Book Box STOREの様子
2 ちょっといきなり本読み！in SEIRANKANの様子
3 ファシリテーター養成講座

ショーとしてのおもしろさと体験するおもしろさ、今回はどちらに重点を置くか

「演劇活動の担い手」と「観客」の双方を育て、新潟全体のパフォーマンスアーツの可能性を広げていくことを目標として、昨年度に引き続き開催しました。今年度は新たにBar Book Box STOREを会場に加えた他、昨年度の「ファシリテーター養成講座」を受講し、免許皆伝を受けた平石氏によるファシリテーター回を設けました。昨年度の参加（台本を読む人）と見学（本読みの様子を見届ける人）の方々から寄せられた声から、「見られている」という負担感を少なくし、参加者とファシリテーターの間で関係性を構築しやすいサイズ感の空間を会場とすることで、より「演劇は誰でも気軽に楽しめる」という実感（ハードルの低さ）を参加者に提供することができるのではないかと考え、Bar Book Box STOREを会場に加えました。台本を読む人として参加された演劇未経験の方からは、「素人参加者にもかかわらず、うまく輪に入れていただいて、ポジティブなお声掛けもいただき、本当にうれしかったです」という感想が聞かれ、「演劇＝上手な人だけがやるもの、好きな人だけが楽しめるもの」という敷居の高さを打破し、経験の有無を問わず誰もが楽しめる機会を提供する目標を達成することができたと考えます。参加・見学の中には、本企画へのリピーターが多かったことも今年度の特徴として挙げられます。昨年見学だった方が今年は友人を連れて見学に来てくれたり、昨年見学者が今年は参加者として申し込んでくださったりする動きがありました。さらに、「昨年度のこのイベントに参加してから、演劇が身近になり、新潟の劇団さんの公演を見に行くようになりました」というアンケート回答もあり、微力ながらも、本企画が演劇の裾野を広げ、新たな観客を創出する入口として機能していることを実感することができました。

継続に向けて

一方で、地元ファシリテーターによる進行の応用力検証と集客の難しさが、今年度の事業実施を通して明らかになりました。昨年度の養成講座受講後、今年4月のモニター開催を経て今回実践に至るまで綿密な準備があったものの、集まる方の多様性に対応する応用力や、ファシリテーターとして参加者とコミュニケーションを取り、安心してチャレンジできる環境を創りながら、進行・演出し、音響操作をするといったマルチタスクを高いレベルでこなす難しさが浮き彫りとなりました。今後は、地元ファシリテーターの応用的な進行技術の定着をめざし、ファシリテーター養成講座受講者同士で連携し、技術向上に努めていくことを考えています。今年度は、演劇を体験しやすい環境を構築することに力を入れて取り組んだことで、演劇経験のない方の参加も昨年度より増加し、演劇の楽しさを味わってもらうことができ、大変収穫がありました。その一方で、事前に参加者を紹介する広報活動をとる事が難しく、見学者の集客に向けた広報戦略に苦戦したため、改善策を検討する必要があります。定員設定によって、一度に大勢の方に企画や演劇の魅力を伝えることが難しいという課題も合わせて感じました。今後は、ファシリテーターのガイドによって、どのような参加者が集まっても、見学していても演劇のおもしろさが十分に伝わることをより明確に広報にのせていくとともに、地元ファシリテーターと連携を取りながら継続的にワークショップを開催することで、ファンを増やしていきたいです。

担当POより：

今年度は、昨年度つかんだ課題である「見せる本読み」と「体験する本読み」それぞれの特徴を鑑みながら開催意図と合致する方法の模索に取り組みられました。開催にあたり、会場選定や定員の設定、会場内のレイアウト方法などを、昨年度の実績をふまえていくつかのパターンを想定しながら検討し、決められていました。体験しやすい環境構築に重点を置くことで、収穫と課題が明確に得られたと思います。「気軽に演劇を楽しめる機会を創出したい」というSouer+さんの目的に向かって、開催意図に応じた環境設定や企画の魅力の伝え方の試行を続けながら、地元ファシリテーターの協力もいただき、演劇を楽しむ機会の継続的な設定や事業の質を維持・向上する取り組みにも挑戦し、深化化して行ってほしいです。（高橋）

岩室AIRプロジェクト2025

令和6年度の実施内容は
こちら



1 からだのばしワークショップの様子
2 人間をやめるワークショップの様子
3 キービジュアル



団体名
岩室AIRプロジェクト実行委員会



採択金額
200,000円（2年度目 助成率1/2）



会場
アーティスト滞在・交流会・ワークショップ・報告会：
岩室シェアハウスとも家
ワークショップ：いわむろや 伝統文化伝承館



開催日

出演：滞在者 木皮成
参加者数：63人（WS2回、交流会、報告会合計のべ人数）

地域とアーティストが日常からつながることをめざして

「一過性ではない継続的な関係性の構築」および地域における創造環境の創出を通して、地域内外・世代・職業を超えた連帯を岩室地域につくることを目的に、昨年度に続いて2回目となるアーティスト・イン・レジデンス（AIR）事業「岩室AIRプロジェクト」を実施しました。今年度は、より多くの地域住民をはじめとして新潟市内の方々にこのプロジェクトとつながってもらうことをめざし、「探求キャンプ」を本格的に開始することにしました。地域外からやってきたアーティストが、岩室温泉の住民とご飯を囲みながら語り、互いのこだわりや仕事観、生活に根ざす哲学を交換し合う。そんな小さな対話の場をつくりました。

アーティストと地域の方の言葉や経験が交差する場に

今年度は応募アーティストの中から、ダンサー・振付家の木皮成さんに滞在いただきました。滞在中にお願いしたことは、滞在記録としてのnoteの更新とワークショップの実施です。noteには、滞在中に木皮さんがとも家の縁側に創作・配置したアーチ状の組み木や、とも家のふすまなどをキャンバスにした作品、2回のワークショップで感じられたことなど、「いかに生活空間（日常）を少しドラマチックな空間（劇的）へ、ずらすことができるのか」という木皮さんの滞在テーマを反映した日々の様子を木皮さんご自身の言葉で投稿いただき、貴重な記録が蓄積されました。また、ワークショップは、参加者が自身の身体や感覚を入口に関わっていく内容で実施されました。昨年度よりも多くの方、そして、年齢層や居住地も広く参加いただくことができ、世代や文化芸術の経験を越えて参加しやすい形だったと思います。

昨年度との違いとして、滞在期間中に複数回の「交流会」と滞在最終盤に「報告会」を開催したことです。

「交流会」では、糸紡ぎの方がとも家に来てくださるなど、地域の方がアーティスト滞在中にとも家に足を運んでくださったり、「報告会」では、滞在の過程で得た気づきや地域の再発見を共有するなど、アーティスト側からの一方的な発表に留めず、地域住民との言葉や経験が交差する場になりました。

昨年度と今年度の活動をふまえ、岩室AIRを「一過性ではない継続的な関係性」をより確かなものとして育てるために、受入れの仕組みと地域の関わり方を段階的に整備していきたいです。また、地域住民の参加の関口を広げるため、ワークショップなどの公開プログラムの設計改善も継続していく必要があると考えています。「身体」「健康」「日常の動き」「遊び」「食」など、住民の関心と接続しやすい入口を明確にし、参加時の心理的ハードルを下げたプログラム設計や広報を行っていきたいです。今年度実施した「交流会」や「報告会」は、異なる業種や世代が自然に同席できる場になると考えています。単発で終わらせず、滞在中に複数回の小規模な対話の機会、例えば、食事を囲む会や短時間の共有会、作業を共にする機会を設け、関係が育つ時間を確保します。これによって、アーティストの参入を「イベント」ではなく「生活の中の出来事」として地域に根付き、住民同士の再解釈・再定義が起きる土壌を育てていきたいです。

担当POより：

今年度滞在された木皮さんが、岩室AIRプロジェクト実行委員会のみなさん、滞在中である岩室シェアハウスとも家の方と会話を重ねられたことで、滞在アーティストの受入れ体制や関係性構築の在り方・可能性がみえてきたように思います。「この建物がかとも家だとわりとわかりにくいから看板があったほうがいいよね」ということから看板を作ったり、破れてしまったふすまをキャンバスに木皮さんが絵を描いたり、という生活の場が変化していくことはもちろん、縁側に組み木のプロセニウムアーチが設置されたり、ワークショップ参加のみなさんと一緒にゴリラのお面をつけたりするなど、プロセニウムアーチやゴリラのお面を通して日常の見え方が少し変わるという体験が、今回の岩室AIRプロジェクトにはありました。これらの体験が蓄積されるだけではなく、共有する人を増やし、岩室AIRプロジェクトが「生活の中の出来事」、ちょっとした変化が生まれるきっかけとして地域に根付いて行ってほしいです。（高橋）

テーマ別プロジェクト助成

- 地域文化の魅力を創造・発信する取り組み
- 文化芸術で子ども・青少年を育成する取り組み
- 文化芸術と他分野とが連携する取り組み

秋葉山AIRの実施 # にいつ昔話 (旧 D-gift)



1 秋葉山AIR Vol.6公演リハーサル
2 秋葉山AIR Vol.7作品創作
3 秋葉山AIR Vol.8ワークショップ



団体名
NEphRiTE dance company



採択金額
285,000円 (2年度目 助成率1/2)



会場
泊まれる劇場スロウハウス



開催日
秋葉山AIR Vol.6 #七色の池：2025年4月24日～27日
秋葉山AIR Vol.7 #にいつの昔話：2025年7月29日～8月2日
秋葉山AIR Vol.8 #にいつの昔話：2025年8月15日～18日

出演：(滞在アーティスト)

秋葉山AIR Vol.6 #七色の池：田村興一郎
秋葉山AIR Vol.7 #にいつの昔話：王有慈 (オウ・ユウ・チー)
秋葉山AIR Vol.8 #にいつの昔話：Aokid
参加者数：179人 (公演・WS参加者、子ども制作を含む合計)
協力：秋葉かみしばいクラブ「青空」、国際・ダンス・エンタ
テイメント専門学校 SHOW! (秋葉山AIR Vol.6 #七色の池)

令和5年度の実施内容は
こちら



第6回 秋のときめきコンサート



1 地域の小学生等と「横越小唄」を共演
2 インド音楽奏者とコラボレーションした「越後追分」



団体名
こはく会



採択金額
135,000円 (3年度目 助成率 1/3)



会場
江南区文化会館 音楽演劇ホール



開催日
2025年11月9日

出演：こはく会/篠笛アンサンブル友の風/新潟民謡扇柳会/民謡友の会/春龍の会/でいがでいなエチゴ/子ども民謡教室 SWAN/民謡キッズBEASTY/新潟青陵高校/横浜国立大学民謡研究会合唱団 ほか

参加者数：182人

後援：新潟市/新潟日报社

過去の実施内容は
こちら



試行錯誤しチャレンジを続けた3年間、今年は地域とのかかわりを深めてみる

民謡団体が多数出演する定例コンサートを開催していましたが、担い手が高齢化し、次世代につなぐ活動を今しなければ、民謡界の衰退はさらに加速し地域の文化が消滅する危機が迫っていると考え、年に1度のコンサート当日だけでなく、事前・事後活動を通じて民謡の楽しさを子どもや若者たちに伝え、裾野を広げる取り組みを、令和4年度より始めました。これまでに、子どもや若者への体験機会の提供や、踊り・演奏指導などを行い、徐々に若い世代の参加が増えてきた手応えを感じていたため、若者の育成は継続しながら、出演者の年代やバリエーションを広げるとともに、市内のさまざまな地域で唄い・踊り継がれている民謡を掘り起こし、コンサートで紹介する活動にも挑戦しました。

歌詞集の配布やインド音楽とのコラボレーションなど興味を引く工夫いろいろ

以前から継続している取り組みとして、和楽器体験で「三味線を続けて習いたい」という子どもたちの声を受けて『子ども民謡教室 SWAN』を立ち上げて指導を行い、そこで練習を重ねた小学生が、昨年度には地方(じかた)として大人に交じって三味線を演奏するまでになっています。また、高校生やキッズダンスの子どもたちに指導をして舞台上で一緒に民謡を踊る演目も取り入れています。多くの子どもや青少年が出演するおかげもあり、観客席にも保護者や友人など若い世代の姿が多く見られるようになってきました。

今年度の挑戦として、地域へ向かって行って練習を重ね、「巻甚句」「横越小唄」「亀田甚句」を地元の方と一緒にステージで披露したり、後継者がいないため当会が保存・継承に取り組んでいる「長湯藻たぐり甚句」を横浜国立大学民謡研究会合唱団の学生に伝授して共に踊ってもらう企画も実施しました。これら地域の民謡は、来場者により深く興味を持っていただけるよう「民謡ミニ歌詞集」を配布しました。また、昨年度のアーツカウンシル新潟 採択事業報告会で繋がりのできたインド音楽のミュージシャンと共演し「越後追分」をサタールやタブラ、和楽器と唄で協奏しました。インド音楽と民謡のコラボは初めての取り組みでしたが、観客の方からは新鮮だった、ハーモニーが美しかったなど好意的な感想をいただきました。

この4年間でさまざまな取り組みを重ね、今年度は地域の民謡を掘り起こすことで地域活性化に貢献でき、民謡の裾野を広げる一端を担えたことは成果だと考えています。この支援事業を受けられるのは今年度が最後となるため、団体内では観覧料の見直しなどの声も上がっていますが、これからも民謡の楽しさを広めるイベントに積極的に参加していくとともに、他ジャンルの演奏家にも民謡を知ってもらい、一緒に活動できるきっかけを作ったり、SNSでの情報発信を継続したりして、引き続き、民謡の認知度向上、継続、発展に取り組んでいきたいと思っています。

担当POより：

4年間の取り組みを通して、子どもや若者にとっては触れる機会が少なく未知のものともいえる民謡を、知ってもらい、楽しんでもらおうという姿勢で、若い世代へ伝えていく熱心な姿が印象的でした。地域で受け継がれている民謡を掘り起こして伝える活動に尽力される一方、まったく異なるジャンルの音楽とコラボレーションして新しい世界を見せてくれるなど、伝統を守りながらもそれに縛られず、民謡の可能性を広げていかれたことが、結果として、参加者の年齢層の広がりや、鑑賞した方の興味の深化につながったと思います。これからも、様々なアイデアを具現化し、楽しみながら民謡の魅力を伝えていってくださることを期待しています。(大浦)

ひとつのテーマで多様なプログラムを実施

秋葉山AIR (旧「D-gift made in Niigata」) は地域文化の醸成とアーティスト・ダンサーの育成を基軸としたアートプロジェクトです。地域の魅力・文化資源・地域資源をアーティストの目線で掘り起こし、発信し地域の方と共有していく取り組みとして、2021年に開始しました。今回は、3回のアーティスト・イン・レジデンス全てをにいつ昔話を題材に横断的なプロジェクトとして実施しました。

【秋葉山AIR Vol.6】では、田村興一郎氏を招聘し、新潟在住のダンサーと地域の子どもたちと一緒ににいつ昔話の「七色の池」を題材にした舞踊小作品を創作し、発表しました。【秋葉山AIR Vol.7】では、王有慈氏が地域の子どもたちと一緒ににいつ昔話「七色の池」と「大岩の下から湧き出た幸清水」を題材にした絵画のワークショップと展示を行いました。【秋葉山AIR Vol.8】では、Aokid氏を招聘し、新津松坂流しへの参列などを経ながらにいつ昔話を題材にしたワークショップとインスピレーションを得た抽象画の制作、展示を実施しました。

にいつ昔話を題材にするにあたり、秋葉かみしばいクラブ「青空」のみなさまのご協力をいただいたところ、地域の文化を繋いできた人々との交流が深まっただけでなく、インターネットでは公開されていない題材や歴史への理解が深まり、子どもたちがおとなと一緒に地域の文化を探究する時間になりました。さらに、アーティストの創作作品において、地域性やオリジナリティーが増し、アーティストのインスピレーションを掻き立てさせる1つの要因にもなりアーティストに喜んでいただくことができました。Aokid氏のワークショップに参加した子どもたちからは、「初めは思いつかなかったけど、考えているうちに色々な絵が出来上がっていった」「同じものを見て色々な絵になっていった」といった言葉が聞かれ、上手に何かを表現することだけではなく、様々な思考や感覚が形になっていくアート体験になったのではないかと考えます。横断的にプロジェクトを実施したことで、継続的に企画に様々な形で参加してきた子どもたちが、回数を重ねるにつれて積極的にテーマに関する完成を求めないような、哲学的な創作活動に踏み込むことができたように感じます。

地域とアートの取り組みの発信・強化に向けて

子どもたちが参加者/鑑賞者としてだけではなく、アーティストを迎えるためのリサーチの段階からプロジェクトに参加できるように【子ども制作】を募る取り組みも展開しました。秋葉山AIR Vol.6終了後からメンバーを募集し、14名が集まりました。滞在アーティストに紹介したい秋葉区の場所をマップに落とし込んだ「おもてなし地図」を作る案や、滞在中の様子を写真・動画に記録する役割が必要、というアイデアが子どもたちから寄せられ、それらのほとんどを実現することができました。子ども制作に取り組んだことで、完成された作品だけではなく、創作過程の共有にもつながりました。【子ども制作】の具体的な活動実績ができたので、次回の公募時にはわかりやすく発信していきたいです。

秋葉山AIR は前身となる「D-gift」を含めて来年度で6年目10回目を迎えます。来年度は、より分かりやすいオンライン上のプラットフォームを作成し、滞在アーティストの公募を行えるようにしたいと考えています。アーティストの受け入れ体制の強化と公募の実現によって、新潟での地域とアートの取り組みの発信を進めていきます。

担当POより：

NEphRiTE dance companyさんは、令和5年度に「D-gift made in Niigata #石油」に取り組まれた翌年、泊まれる劇場スロウハウスの立ち上げと運営を開始され、これまでの活動の蓄積から、地方創生に取り組むコミュニティや地域の子どもたちを巻き込むことに力を入れる必要性を感じ、令和7年度の企画を立ち上げられました。【子ども制作】の取り組みを通して、「公演を鑑賞する」「ワークショップに参加する」以外の、子どもたちと事業・アーティスト・地域の関係性を模索し、その具体的な姿が見えてきたように感じます。ダンスや文化芸術はもちろん、それ以外のさまざまな興味や得意なことをきっかけに「秋葉山AIR」に関心や接点を持つ子どもたちが増え、地域の魅力や文化が繋がっていくことを期待しています。(高橋)

幼児教育を学ぶ学生と共に考える「絵本の世界」へのアプローチにより、子どものダンスへの興味・関心を深める



1 「身体と心で聴く 絵本の世界 Vol.2」 2 新潟青陵大学学生有志との動き探求の様子 3 Studio奏蔵舎1周年記念公演



団体名
町屋本町アートプロジェクト



採択金額
250,000円 (2年度目 助成率1/2)



会場
Studio奏蔵舎



開催日
「身体と心で聴く 絵本の世界 Vol.2」：2025年6月21日
Studio奏蔵舎1周年記念公演：2025年10月12日/13日

出演：

「身体と心で聴く 絵本の世界 Vol.2」：平石実希/池ヶ谷奏/
新潟青陵大学・短期大学部ダンス部、他学生有志
Studio奏蔵舎1周年記念公演：平石実希/公募ダンサー4名/新潟
青陵大学・短期大学部ダンス部、他学生有志/池ヶ谷奏

参加者数：153人 (5回公演合計)

協力：新潟青陵大学福祉心理子ども学部子ども発達学科
佐藤菜美・学生有志

後援：新潟市 (Studio奏蔵舎1周年記念公演)



子どもたちがダンスや身体表現に触れられる環境づくりをめざして

昨年度の「Studio奏蔵舎オープニングイベント」開催時に子どもたちの来場が少なかったことから、地域の子どもたちにとってダンスや身体表現が身近にあり、気軽に触れられる環境を整えるための導線づくりが必要であると考えました。そこで、子どもたちの身近にある「絵本」を題材に、ダンスや身体表現への興味・関心を促す企画として、「身体と心で聴く 絵本の世界」を立ち上げました。

Studio奏蔵舎から近隣に位置する新潟青陵大学 福祉心理子ども学部子ども発達学科の佐藤菜美准教授および同学科の学生有志、ダンス部の協力を得て、「身体と心で聴く 絵本の世界 Vol.2」の開催に向けて、絵本の世界をどのように身体表現へとつなげていくかを検討しました。学生と共に大学図書館で絵本を選定し、題材や構成順、内容の伝わりやすさ、視覚的に楽しめる動きなどについて意見を交わしながら創作を進めました。公演当日は、学生による読み聞かせと、絵本の選定や動きを共に考えた2作品を上演しました。公演後に学生からは、子どもとの距離の取り方・保護者への対応・環境面の課題等のフィードバックをもらいました。一方で、子どもの反応を直接体験できたこと、表現活動の楽しさを実感できたことは、学生にとっても手応えになっていたようです。

連携関係をつくる、幅広い世代がアートを通じて交流する

「Studio奏蔵舎1周年記念公演」では、公募で集まった小学生4名や新潟青陵大学学生と一緒に絵本を題材に創作した作品、Studio奏蔵舎で招聘アーティスト(ダンサー・振付家 富岡權氏)がクリエイション・振付をした作品の2つを上演しました。公募で集まった子ども4名のうち1名は「絵本の世界」に観客として来場していた方で、その他3名はStudio奏蔵舎に初めて訪れる子どもたちでした。出演した小学生の保護者からは、「作品で使った曲を口ずさんだりしている」という声や、出演した大学生からは、「異年齢交流ができて良かった」という声も挙がっていました。子どもたちとのクリエイションに初めて取り組み、参加希望者や保護者との関係構築や、実施形式に工夫が必要であることに気付き、芸術家として地域に根差すことの意義と難しさを肌で感じる好機となりました。来場者からは、「帰宅後に子どもが小学生の動きを真似していた」「作品中のセリフや音楽を繰り返し口にしていた」といった感想も寄せられ、公演体験が日常に持ち帰られ、記憶に残るものとなっている様子が見られました。未就学児の入場が可能な公演は多くない中で、本事業を通じて親子が安心してアートを楽しめる環境を創出できたことは、意義深い取り組みであったと考えています。

大学との連携を引き続き取っていくことで、子どもとの関わりをより深く考えたり、学生のフィールドワークの場として町の中にある文化拠点を活用する取り組みを行うことができます。来年度以降も、継続的な地域連携による「アート×教育×福祉」の拠点づくりを推進できると考えています。また、子どもとの関わりにおいて、異年代交流の場はとても価値があり、また年齢別・発達段階別に適した作品構成や演出方法の開発にも思考の余地があると考えられます。今後は、保護者・地域住民の参画を促す「共創ワークショップ」形式の導入なども視野に入れながら、Studio奏蔵舎の在り方を地域と共に考えていきたいと思ひます。地域の中に子どもたちへの導線を丁寧に構築し、幅広い世代がアートを通じて交流できる環境づくりに、引き続き力を入れていきます。

担当POより：

昨年度の「公演に出演する人を公募し、一緒にクリエイションする」取り組みに、上演の仕方や環境をどのように整えるか、という点が今年度加わり、共に考える関係者を増やして取り組まれたことが印象に残っています。題材とする作品選びの際に幼児教育を学ぶ学生から寄せられたコメントは、どのように子どもや保護者に参加してもらおうかという視点で、私自身も勉強になりました。昨年度の取り組みと、今年度の取り組みによって、鑑賞環境の作り方や、子どもたちと一緒に作品を作る時に気を付けたいポイントが明らかになってきました。多様な方々が、それぞれに合った文化芸術体験ができる地域の文化拠点として、さまざまな趣旨の事業が生まれることを期待しています。(高橋)

子どもに「生の演劇」を届ける人材育成プログラム



1 全体の様子
2 講師の平丸氏による講演



団体名
子ども劇場おやこ劇場新潟県センター



採択金額
95,000円



会場
巻農村環境改善センター



開催日
2025年11月15日

出演：講師 平丸久美子
参加者数：23人

子どもたちに舞台芸術を届ける意義をひろめ、チームをつくることをめざして

一定以上の質が担保された文化芸術にふれる機会は、子どもの成長発達に必要な不可欠なものであり、その機会創出をメインに、私たち子ども劇場おやこ劇場新潟県センターは長らく活動してきました。2024年には、大型舞台から小さな作品までが一堂に会する「子どもと舞台芸術大博覧会 in NIIGATA」をりゅうとびあとともに開催しました。この取り組みを契機に、子どものための舞台芸術作品をりゅうとびあの主催事業のひとつに選定する役割を担いました。この役割を進める中で、ある程度以上の大型作品を、少なくとも小学校期に数度は鑑賞する機会を創出していかなければならないという使命感を持ちました。小学校期に舞台芸術にふれる必要性を十分に理解し、その実現に向けて協力していくことができる「おとなチーム・ネットワーク」の構築が必要なのではないかと考え、広く一般市民に向けて「生の舞台芸術を子どもたちに届ける意義」を理解していただく本事業を企画しました。

外部の理解者を増やしていきたい

本事業参加者の中から、今後、新潟市内で子どものための舞台の上演機会を創出する意志を持ったおとなチームが十数人規模で生まれることを目標としました。そこで、2026年1月にりゅうとびあで上演される人形劇団むすび座「ニルスのふしぎな旅」の脚本を担当された平丸久美子氏を講師に招いた講演会と学習討論会を設定しました。平丸氏による講演会では、世界からローカルなことまで想像をはたかせることや、世界の多様性を考える機会など、これから生きる子どもたちに伝えたいことをテーマに語っていただきました。参加者は、当初の目標からは少なく、子どもたちが舞台芸術にふれることに対して理解を既に持っている方々の参加が大部分を占めてしまったことは、反省点として挙げられます。しかし、参加者の中には子育て中の方からの参加も見られ、大変良かったです。

今回の事業を通して、「子どものための舞台の上演機会を創出する意志を持ったおとな」は一定数見つけることができたと思います。今後の軸になっていく集団は見えたと思います。私たちの組織内の枠以外(子どもに関わる職業の方々(教師・教諭・小児科医・保育士)への広報を行いました)が、十分に集めきれませんでした。私たちは会員を増やす・キープする能力には長けていると自負しますが、一方で、外部の人と組んで物事を一緒に取り組む能力には大きく欠ける、そのことが如実に示される結果となりました。今回のような学習講演会は2026年度も継続する方向です。これに向け、外部の働きかけ方を慎重に検討し、効果的な方法のノウハウを研究したいと考えています。中長期的に、(5年程度をめどに)このチームが力をつけ、公演そのものを運営・実施してゆけるサポートを進めていきたいです。

担当POより：

子ども劇場おやこ劇場新潟県センターさんのこれまでの取り組みがあったからこそ、より多くのおとなに、子どもたちが舞台芸術にふれることの意義を知っていただきたい、そして、子ども劇場おやこ劇場以外の、子どもたちが舞台芸術にふれる機会をつくるおとなのチームを作りたい、という意識が生まれたのだと思います。多様な団体が機会を創出することによって、子どもたちや保護者の方々の選択肢が将来的に増えることが期待できる取り組みです。今回は残念ながら、子ども劇場おやこ劇場新潟県センターさんが持つネットワーク内の参加が多くを占めてしまいました。既存のネットワーク外に理解者を増やしていく取り組みは、突破口を見つけることも含めて難しさがあると思います。この課題を受け止められ、来年度以降も取り組みを継続されていくことに心強さを感じています。(高橋)

「放課後デザイン」の普及プロジェクト（放課後デザインフェス）



1 地域の大学生による事例発表
2 軽音楽部の中学生による演奏
(1、2とも ©2025 放課後デザイン協会)



団体名
放課後デザイン協会



採択金額
480,000円



会場
新潟県民会館 小ホール



開催日
2025年11月23日

出演：

クロストーク：放課後デザイン協会(羽賀万起子/小倉壮平)/
漆原尚
事例発表：Smile軽音楽部/新潟県立中条高等学校/しるえるはうす
/ゆめのき学園

参加者数：62人

後援：新潟市

新たなデザイン概念として「放課後デザイン」を普及させたい

小中学生にとって、家庭・学校に続く「第3の居場所である放課後」はとても長い時間。しかし、子どもたちが自分の力だけで放課後の過ごし方を選ぶことは難しいのが現状です。そこで、子どもたちの現在と未来を豊かにすることを目的に、子どもを取り巻く時間と空間を意図的に設計する「放課後デザイン」という概念を立ち上げました。そして、放課後の時間を豊かにする先進的な取り組みを行っている団体を招いての基調講演とクロストーク、放課後デザインを実践している団体の事例共有を行うイベントを、自由に楽しく参加できる「フェス」という形式で開催することで、この概念の普及をめざしました。

フェスで生まれた繋がりを活かして、さらなる展開をめざしたい

フェスに先立ち、放課後の時間を豊かにする先進的な取り組みを行っている機関を視察しました。当初予定していた視察先候補とは調整がつかず、最終的に東京都豊島区が運営する中高生センター「ジャンプ東池袋」を視察させていただきましたが、中高生ファーストの居場所づくり、遊びを起点とした多機関連携、行政が責任をもって支援に向き合う体制構築の重要性について知見を得ることができ、フェスでは基調講演に代わって、当協会のメンバーが視察報告を行いました。

フェスは二部制で開催し、一部は「大事なものはみんな放課後にあった」をテーマに、ジャンプ東池袋の視察報告をまじえた、協会メンバー2名とデザイナーによるクロストークを実施しました。二部では、協会が選んだ4団体である、Smile軽音楽部（部活動の地域展開）、新潟県立中条高校（探求学習・放課後居場所カフェ）、しるえるはうす（子どもと大学生がともに学ぶ場）、ゆめのき学園（大人と子どもが楽しみ、育ち合う居場所）に、それぞれ事例発表を行ってもらい、発表後は、大人審査員、子ども審査員と、来場者のみなさんの投票によりグランプリを決めました。

当日の来場者が集客目標の100名に達しなかったことは反省点として挙げられますが、多様なステークホルダーを巻き込んだことや、横のつながりと評価の仕組み構築ができたことは成果だと捉えています。また、当会の在り方についてミーティングを重ねるうちに、これまでの小学生対象から、自身の子どもの成長に合わせて関心が中学・高校へと向いていることに気づき、広義の放課後の在り方として視察先や事例発表団体に高校生たちを含めていったことで、先を見据えた、より込みのある世界観を学ぶことができたと感じています。今回、「小学生の親子」や「放課後に関わる仕事をしている人々」へのアプローチに課題が見えてきたので、改善を加えながら、今後は、本事業で生まれた繋がりを活かしたネットワークの構築、継続的な学びと交流の場の創出、教育・保育・デザイン・社会課題に関心を持つ未来の担い手との連携強化や、新潟発のソーシャルプロジェクトとしての「放課後デザイン」の発信をめざしていきたいです。

担当POより：

新しいデザイン概念の普及させることをめざした独創的な取り組みでした。メンバーで話し合いを重ね、自分たちの関心の広がりを感じて学びを深められたことや、多様な属性の人たちを巻き込み、繋がりを作れたことは、団体の財産になったのではないのでしょうか。子どもたちの居場所や時間を豊かにする「放課後デザイン」という取り組み・概念が広がっていくことで、若い世代がいきいきと暮らせるまちが増えていくことを願っています。（大浦）

HomeShip vol.2



1 山崎氏キャリアトークの様子
2 ワークショップの様子



団体名
ダすけ



採択金額
375,000円（2年度目 助成率1/2）



会場
ワークショップ・リハーサル：ゆいぽーと
（新潟市芸術創造村・国際青少年センター）
公演・キャリアトーク：Studio 奏蔵舎



開催日
ワークショップ：
2025年12月27日～2026年1月7日（全10回）、
2026年1月8日/9日（通し稽古）
公演・キャリアトーク：2026年1月10日/11日
アーカイブ動画公開：2026年2月

出演：

公演 田村興一郎(振付・出演)
外山陽大(振付・出演)/酒井瑠々奈/羽田光梨
五十嵐聖宗/金子颯太/須崎友馬/竹石晴南/根本なつき
キャリアトーク
山崎広太（1月10日）
ダすけ（鈴木亮祐/宮悠介/茂木孝介、1月11日）
参加者数：124人（WS・公演・キャリアトーク合計）
後援：新潟市、新潟市教育委員会（公演・キャリアトーク）

昨年度の調査から踊り手・創り手として発表・体験する機会を設定する

昨年度に引き続き、新潟出身若手振付家3名によるオムニバス公演と、ワークショップ、キャリアトークを実施しました。公演には、前年度のワークショップ講師でありキャリアトークにも登壇いただいた田村興一郎氏、新潟出身の若手振付家・外山陽大氏それぞれが振り付けた作品を上演しました。昨年度実施した調査で得られた声をもとに、踊り手・創り手として発表・体験する機会を設定しようと、新潟在住の10～20代を主な対象に、「ダすけ」メンバーの宮悠介が講師を務めて複数日にわたるワークショップを実施しました。ダンスに限らず演劇や音楽など多様な身体表現を横断的に探求し、その成果をオムニバス公演の1作品として発表しました。ワークショップ作品には高校生3名、大学生1名、社会人1名の計5名が参加しました。世代の異なる参加者が創作を通じて交流し、終了後には舞踊活動の継続に意欲を見せる参加者も現れるなど、地域における人材育成と交流の場として機能したと感じています。

歩みの可視化・表現の多様性の提示を通して、ダンスが生まれ、循環する場所へ

振付家やダンサーの歩みを可視化する「キャリアトーク」と、身体表現の多様性を提示する「オムニバス公演」の両輪により、「次世代への動機付けとキャリアモデルの提示」、「多様な文脈の交流によるダンスコミュニティの活性化」、「多面的な身体表現の提示と観客の審美眼の向上」の3つの成果を上げたと考えます。キャリアトークでは、「未知の芸術環境への知的好奇心（山崎氏）」と「自身に引き寄せられるロールモデル（ダすけ）」の双方を提示できたことで、将来への具体的な希望と意欲を醸成する機会となったと思います。また、オムニバス公演・キャリアトーク・ワークショップの構成を継続することにより、「県外で活躍するプロフェッショナル（ゲスト）」、「地域で活動する市民・学生（ワークショップ参加者や来場者）」という異なる文脈を持つ層が、創作を通じて交錯した点に大きな意義があると考えます。アンケートからも、こうした多様な背景を持つ人々が交流・混合された点に地域コミュニティの深化を感じ取る声が寄せられました。参加した高校生からは「少し怖かったが興味が深まった」という率直な反応があり、未知のコミュニティへ飛び込む体験が、次世代の視野を広げる契機となったようです。オムニバス公演の鑑賞者からは、地域住民が既存のスタイルと比較した感想も寄せられ、多様な価値観の中から美を見出す「審美眼」を養う機会となったと思います。運営面では事業規模を適正化し、客席稼働率は90%を超え、昨年度を上回る動員実績となりました。一方で、当初ターゲットとしていた25歳以下および高校生の来場者が少なかった点は課題として残りました。裏を返せば、ターゲットとしていた若年層以外の幅広い世代からの来場があったことを示しており、当初の想定を超えた層へリーチできたことは本事業の予期せぬ成果といえると思います。次回以降は、この新たな顧客層を維持しつつ、課題である若年層へのアプローチとして、県内の高校・大学のダンス部等へ赴くアウトリーチ活動の実施を検討しています。現場での直接的な交流を通じて若年層との接点を強化し、公演への集客およびワークショップ参加者の開拓につなげていきます。本事業を通じて、新潟を「ダンスが生まれ、循環する場所（HomeShip）」へと深化させるべく、次なる展開へと接続していきたいです。

担当POより：

ワークショップの様子を拝見した際に、学校の枠組みや、学生と社会人という年齢を超えた会話・創作を通して、ワークショップ参加のみなさんは自身の来年、5年先、10年先、20年先の姿、そして、ダすけのみなさんにとっては新潟のダンスの創作環境を考えるきっかけになっていたように感じました。ワークショップ参加の方々、そして、キャリアトークをお聞きになった方々と、ダすけのみなさんがテーマとする「ダンスにおけるキャリアを考える」ことを、昨年度よりも深く共有できたのではないのでしょうか。新潟でダンスに取り組む高校生・大学生にとって、ダすけのみなさんやダすけの企画が、ダンスやダンスのキャリアを考える際に最も身近で安心して壁打ちができる存在になっていくことを期待しています。（高橋）



第三回 響きと人々 古澤史水・巫美麗二人会 「貌」—義と情のあわいにて—

令和6年度の実施内容は
こちら



団体名
巫舞台



採択金額
500,000円（2年度目 助成率1/2）



会場
出前公演：新潟県立新潟よつば学園
公演：りゅーとびあ 新潟市民芸術文化会館 能楽堂



開催日
出前公演：2025年9月17日
公演：2025年10月4日

出演：出前公演 巫美麗/篠田八助
公演 琵琶奏者 古澤史水/巫美麗/人形浄瑠璃「猿八座」
参加者数：出前公演 参加生徒6人
公演 194人
後援：新潟市（公演）



1



2



3

1 琵琶の演奏
2 三味線体験ブース
3 人形浄瑠璃の上演

若い世代に届けたい

古典芸能である琵琶演奏と人形浄瑠璃の公演を通じて、伝統芸能を「生きた芸能」として認知し、普及させることを目的に事業を実施しました。昨年度は、視覚障害者福祉協会の方に企画段階から協力いただき、視覚障害を意識しながら取り組みました。昨年度は公演と学校行事等の日程が重なったことにより学生等の若い世代の参加が少なかったです。そこで今年度は、公演日以外で古典芸能にふれる機会の創出をめざして学校へ訪問する出前公演を企画しました。新潟県立新潟よつば学園へ訪問し、生徒と教員に琵琶と人形浄瑠璃の人形の解説・体験・実演を行いました。学校の授業で琵琶語りや人形浄瑠璃を学ぶことはあっても、実際にその技術や演奏を体験する機会はほとんどなく、今回は実際に琵琶や人形に触れながら学ぶことができ、感覚的に伝統芸能を体験する貴重な機会となったという声をいただくことができました。団体としても、さまざまな障がいへの対応を学ぶと同時に、目の前の人、何に不安を感じ、何を望んでいるのかを考えることの大切さにも気づくことができました。

足を運ぶところから、誰もが安心して楽しめる公演をめざして

公演では、「誰もが安心して楽しめる」ことをめざし、昨年度に引き続き、音声ガイド用QRコード付きパンフレットを用意した他、バリアフリー対応に特化したアクセス紹介動画（字幕・読み上げ音声付き）を新たに作成しました。アクセス紹介動画がアンケートでも好評いただき、昨年度よりも、障がい者の参加が多くなり、ある程度達成できたものと捉えています。

また、多くの人に琵琶語りや人形浄瑠璃をより深く理解していただくために、歴史や楽器に関する解説も交えた構成にしました。昨年に引き続き体験ブースを設置し、今年度は琵琶の他に人形と三味線の体験も加えました。その結果、実際に楽器や人形に触れて体験いただける方が昨年以上に増えました。

今年度は運営体制も改善しました。代表が担っていた業務を分散したとともに、メンバー内で進捗状況を随時確認できるようにシステムを構築しました。これにより、イベント運営を組織的に進めることができ、より広範な広報活動や障がい者への配慮が実現できたと思います。

次年度は、昨年度同様に映像作品と琵琶語りを組み合わせた公演を予定しています。

私たちの目標は、さまざまな障がいを持つ方を含め、すべての人が楽しめる公演を、今後も継続的に提供することです。これにより、より多くの人々とつながり、障がいを持つことが心理的な負担にならない社会を目指すとともに、障がいのない方にも新たな気づきや視点の変化が生まれるような活動を続けていきたいと思っています。これまでの活動を通じて、当団体の公演については「安心して来場できる」「ひとつひとつの公演を大切に作り上げている」という声をいただいています。これからも引き続き学び、実践を重ね、より多くの方々に価値ある体験を提供できるよう努めていきます。

担当POより：

巫舞台さんによる今年度の取り組みは、昨年度の実施内容と、そこから見えてきた課題に正面から向き合われていたと感じています。

学校への出前公演では、実演よりも体験に重きを置いて取り組まれていました。「琵琶の重さはどうですか」、「今触っている部分は貝でできています」などと、琵琶の重さや楽器の触った感覚、音を出したときの楽器の振動や響きについて、一人ひとりと話をしながら進めていた様子がとても印象に残っています。また、公演当日の体験ブースに新たに加わった人形浄瑠璃の人形体験は、人形遣いの方が「やってみませんか」と人形を持って来場者に声を掛けており、体験しない方も人形遣いの方と会話が生まれていました。昨年度に続き、来場された方がそれぞれに楽しめる公演づくり、そして、今年度は公演前から安心して来場できるサポート提供も加えられ、試行錯誤とノウハウが重ねられています。継続した事業実施に向けて、巫舞台さんに合った形を見つけてほしいです。（高橋）

イベント「MORRY GO ROUND」の開催



1



2

1 おさかなカルテット (from東京交響楽団)
2 中央ヤマモダン『山彦のバッティングフォーム』



団体名
MORRY GO ROUND 実行委員会



採択金額
500,000円（ステージイベント部分への助成）



会場
万代島多目的広場・屋内広場 大かま



開催日
2025年10月17日/18日

出演：[演劇]中央ヤマモダン（17日）
[音楽]おさかなカルテット(from東京交響楽団)（17日）、
ABBY（17日/18日）、
岡村翼、omu-tone（18日）
参加者数：1,300人（2日間合計、ステージイベント以外含む）

メリーゴーランドと音楽・演劇をきっかけに新潟の里山の今を可視化する

「MORRY GO ROUND」は、山の人も街の人も楽しめる温度のあるイベントを開催することで、新潟の里山の今いる現在地を可視化することを目標としたイベントです。今回は、MORRY GO ROUNDの活動の象徴として、県産広葉樹を使ったメリーゴーランドをイベント会場に出現させ、それを舞台として、書き下ろしオリジナル台本の演劇と、音楽の演奏会をメインコンテンツとしました。おさかなカルテットとABBYの演奏中、順番にお子さんをメリーゴーランドに乗せた際には、子どもたちはもちろん楽しく乗っていましたが、それ以上に、弦楽四重奏の生音をバックにわが子がメリーゴーランドに乗って楽しむ姿を、お母さんお父さんがとてうれしそうに写真を撮り、「こんな贅沢なことしてもらっていいんですか？」と言ってくれたのが印象的でした。さらに、その光景をみていた多くの来場者の方から、「なんて幸せな空間なんだ」「多幸感につつまれたよ」と口々に感想をいただきました。中央ヤマモダンの演劇中は、イベント全体としての来場者数のピークで、会場は熱気に包まれていました。当日初見の方が、後日の中央ヤマモダンの定期公演に赴いたとの情報も聞き、新しいファン層の獲得にほんの少しでも貢献出来てうれしく思います。岡村翼のライブは、午前中の開催ということもあり、岡村さんの歌声とそのおだやかな会場の光景とで、普段から会場・大かまの管理運営している担当の方からは「こんなにあったかいイベントはないよ」との声をいただきました。omu-toneは、子どもたちに声を掛けてくださり、楽器に手が届きそうなほど近い場所で演奏を聞くことができました。一方で、会場の天井が高く、生声ではなかなか後列のお客様まで声が届かないことへの対応など、会場の特性を考慮した音響環境の準備が必要であることがわかり、次回への課題も明らかになりました。また、ボランティアスタッフで参加してくれた人の一部から、次回開催時も関わりたいと言ってくれた方が数人いました。次回はボランティアのグループを組織して、当日だけでなく準備段階から深くかかわってもらおうことで、当日のオペレーションを強化していきたいです。

MORRY GO ROUNDにおける文化芸術の役割

MORRY GO ROUNDは、「行政、林業業者、製材業者、家具製造業者、消費者」この五者がお互いの動きや現状を少しずつ理解していくことで、新潟の森のあたらしい局面を切り開くことができるかもしれない、と考えています。今回のイベントはその相互理解を深めていく、象徴的な取り組みとなりました。循環する五者は、「一般的には繋がっていないいわゆる顔の見えない関係性で、お互いに利益が反したりする場面も多く、コミュニケーションすらままならない」。これが日本における森の循環の現状でもあります。ここに、一見関係がないように思える文化芸術分野が媒介したことで、五者の相互理解が促進され、新たな価値が生まれる礎となる兆しが見えました。文化芸術が、本質や目指すゴールは同じだということ、皆がわかる言語に翻訳してくれた感覚、MORRY GO ROUNDにおける演劇や音楽の役割は、みんなの通訳者であったのだと思います。今回は、関係者および一般の方々に対しての、MORRY GO ROUNDの開会宣言とも言うべくイベントでした。スタートであり、ここから、地域材の取組み「MORRY GO ROUND」ブランドのコアを確立させて、新潟のプロダクト・新潟の文化芸術を含む魅力を全国へと届けてゆくに活動を続けようと思います。

担当POより：

さまざまな目的や年齢の人が集まって、同じ空間・時間を共有していたことが、今回の事業の特徴だと感じています。ステージ公演ご出演の方から、「音楽や演劇の公演や木製メリーゴーランドの制作、家具、木工、そして飲食も含めてクリエイションの空間になっていると思います」、といった言葉がありました。家具や木工分野の企画だけでなく、音楽・演劇のステージを交えたことで、文化芸術に生業や興味の軸がある方、森林や木工、家具産業に軸を持つ方々が一堂に会し、それぞれが、創り手・担い手・作品の受け手になり、MORRY GO ROUNDを通して知ったこと、感じたこと、思い出を誰かに伝えるつなぎ手にもなっているのではないのでしょうか。

今後のMORRY GO ROUNDの活動を通して、文化芸術と産業が双方向に補完したり、影響し合ったり、調和しあったりすることを期待しています。（高橋）

『目で楽しむお笑いライブ』



1



2



3

1 AI音声文字通訳による字幕 3 手話通訳以外のサポート体制
2 セリフをスライドで投影 (見えやすい案内表示)



団体名
一般社団法人バリアフリーライブプロジェクト



採択金額
500,000円（アクセシビリティ対応部分への助成）



会場
新潟市巻文化会館



開催日
2025年12月13日

出演：ロッチ/ビックスモールン/ハギノリザードマン/や団/
ウエスP/こたけ正義感/金の国/NGT48(佐藤海里/甲斐
瑞季/辻田季音)

参加者数：337人（うち無料招待 32人）

後援：新潟市/新潟市教育委員会/一般社団法人新潟県聴覚障害者
協会/社会福祉法人新潟市社会福祉協議会

協力：まきフェス実行委員会

聞こえる・聞こえないにかかわらず、みんなで一緒にお笑いを楽しみたい

大都市では、鑑賞サポート付きの演劇公演なども一部ありますが、障がいのある方がエンタメ鑑賞をする機会やサービスはまだ乏しく、特に地方では稀です。そこで、企画や演出を工夫して障がいのある方も一緒に楽しめるようなお笑いライブ公演に取り組みました。聞こえない・聞こえにくい方も安心してご来場いただけるよう、プロジェクター投影による字幕通訳や手話通訳者による会場案内のサポートを用意し、聴覚に障がいのある方を無料招待するための資金をクラウドファンディングで集めました。また、聞こえる方には耳栓を配布し任意で身につけていただくことで、聞こえない方の環境を体感し、理解していただく試みも実施しました。

情報保障に課題が残るも、初めての鑑賞機会を提供できたことに手応え

公演準備として、聴覚障害者協会、手話サークル、社会福祉協議会や耳鼻科医院に働きかけを行いました。協会経由で市内の手話サークルにチラシを配布してもらえたことで、サークル関連の方から多くご来場いただけました。また、県内すべての耳鼻科医院へ協賛依頼の手紙やチラシ・ポスターを送り、結果として協賛をいただくこともできました。

当日は、障がいのある方の受付を一般より早く開始して、手話通訳者1名に受付の補佐をしてもらい、先に安全に座席へ案内するよう試みました。その他にも、受付周辺に座席表を掲示したり、ホール入口やトイレの場所の案内を見えやすいように大きく掲示してバリアフリー対応に努めました。公演では、出演者7組がコントや漫談、物ボケや身体を使ったボディアートなどを披露。後半は出演者全員によるジェスチャーゲームも実施し、一部の演者が手話を使う場面もありました。出演者もスタッフも一番頭を悩ませ苦労した点は、上演時の情報保障です。7組のうち、5組は事前にタイトルやセリフのスライドを用意し、2組はAI音声文字通訳を使用しましたが、スライドはアドリブができない、音声文字通訳は、数秒の時差や誤訳が生じるというデメリットがあり、聴覚に障がいのある方へコントを伝えることの難しさを実感しました。

情報保障についての課題は残りますが「聴覚障がい者も健聴者も一緒に楽しめるお笑いライブ」という日本初の試みであろう企画を実現でき、来場された障がいをお持ちの方のほとんどが初めて生でお笑いに触れて、大変喜んでもらうことができました。また、出演した芸人さんや芸能プロダクションにとっても「バリアフリーのお笑い」を考えていただくきっかけになったことや、メディアやSNSに多く取り上げられ、バリアフリーお笑いライブという取り組みを広く知ってもらえたことも成果ではないかと考えます。今後は、企画段階から障がい当事者の方を交えて、出演者やベストな情報保障などを議論し、年1回の開催をめざしていきたいです。

担当POより：

障がいのあるなしに関係なく、一緒に笑って元気になってもらいたい。という思いで、関係各所に働きかけながら、ライブを作り上げていかれる姿が印象的でした。ライブ当日は、聴覚に障がいのある方が安心して来場し、鑑賞していただけるよう様々な工夫がされていましたが、バリアフリーをめざしたことで、結果的に誰にとっても過ごしやすいユニバーサルデザインになっていた部分が見受けられました。今後は、当事者の声を企画に取り入れながら、参加した誰もが、同じ場所で気兼ねなく楽しめる鑑賞機会を提供していただけたら嬉しく思います。（大浦）

資料編

令和7年度 文化芸術活動に関する支援事業 募集要領（概要）

※詳細はアーツカウンシル新潟ウェブサイト（<https://artscouncil-niigata.jp/7417/>）をご確認ください。

【事業の趣旨】

アーツカウンシル新潟では、新潟市内の文化芸術振興に加え文化芸術活動*を契機とした地域社会の創造的持続・発展をめざし、市民・団体等が自身を取り巻く環境や状況に対する意識を起点に取り組む文化芸術活動や、文化芸術とさまざまな人・組織・分野が連携・協働する取り組みに対して伴走支援・助成を行います。

※文化芸術活動とは
文学や音楽、美術、演劇、舞踊などの「芸術」のほか、メディア芸術、伝統芸能、デザイン、工芸、生活文化、歴史文化、食文化などを含む、幅広い分野の活動（プロジェクト（事業）の実施や文化芸術団体の運営など）です。

【対象となる取り組み】

■新プロジェクトへのチャレンジ助成

初めて文化芸術活動に取り組む団体や、活動実績のある団体が新たに挑戦するプロジェクト（事業）で、特定の人や団体だけでなく、広く市民に開かれた取り組み

■テーマ別プロジェクト助成

新潟市内で実施するプロジェクト（事業）で、下記の3つのテーマのいずれかに該当する取り組み

①地域文化の魅力創造・発信する取り組み

文化財や身近にある地域の文化的遺産など、有形無形を問わず、新潟市内に固有の価値ある文化資源に着目し、それらの活用に取り組み、次世代につないでいくためのプロジェクト

②文化芸術で子ども・青少年を育成する取り組み

未来を担う子どもや青少年が文化芸術に触れることで、自身や他者の個性を見つめ直し、豊かな感性や創造性、コミュニケーション能力を育む環境づくりをめざすプロジェクト

③文化芸術と他分野とが連携する取り組み

文化芸術基本法に示された「観光、まちづくり、国際交流、福祉、教育、産業その他の各関連分野における施策との有機的な連携」をめざし、関連分野と連携して文化芸術の多様な可能性を活かした創造に挑戦するプロジェクト

■団体助成

団体が抱えている課題や新たな枠組みへのチャレンジに対する取り組み、個人による新たな文化芸術団体の設立など

【助成の対象者】

主に新潟市内で活動するグループや団体もしくは個人*で、下記の項目すべてを満たし、事業の遂行が可能な者。

- 本申請に関して、アーツカウンシル新潟に事前相談期間中の相談（対面・オンライン）を行っていること
- 団体の構成員のうち半数が、市内の在住者、在勤者、在学者のいずれかであり、そのうち少なくとも1名が在住者であること（個人の場合は、申請者本人が在住者であること）
- 団体の構成員のうち在住者（個人の場合は申請者本人）が、市税を滞納していないこと
- 事業関係者に暴力団等の関係者を有していないこと

※個人が申請できるのは、「団体助成」において新たに団体を設立する場合に限ります。採択された場合は、原則としてこの支援事業における活動の中で団体を設立してください。

【得られる支援】

■助成金による支援

助成金の額 新プロジェクトへのチャレンジ助成/団体助成 上限20万円
テーマ別プロジェクト助成 上限50万円
※5千円単位（端数切捨）

助成率 対象となる経費の 1年目=2/3以内 2年目=1/2以内 3年目=1/3以内

■申請受付期間・助成対象期間

第1回 事前相談期間：2025年1月31日（金）～2025年2月21日（金）

受付期間：2025年2月22日（土）～2025年2月28日（金）

助成対象期間：2025年4月1日（火）～2026年2月28日（土）

第2回 事前相談期間：2025年7月1日（火）～2025年7月25日（金）

受付期間：2025年7月26日（土）～2025年7月31日（木）

助成対象期間：2025年9月1日（月）～2026年2月28日（土）

■その他の支援

申請団体のみなさまとお話を重ね、よりよい事業展開となるよう「伴走支援」を実施します。

【審査評価項目】

■新プロジェクトへのチャレンジ助成・テーマ別プロジェクト助成

評価項目	審査の観点
方向性	・事業の趣旨、目的、動機が助成事業のめざす「新潟市内の文化芸術振興に加え文化芸術活動を契機とした地域社会の創造的持続・発展」に資するものか。 ・市民や他団体、地域に好影響をもたらす事業となっているか。
計画性	・事業プラン、スケジュール、実施体制、広報戦略などが具体的かつ適切に計画されているか。 ・資金の確保や使途の妥当性など、現実的な収支予算計画となっているか。
創造性	・固有の特色を活かした個性的な事業となっているか。 ・他分野と連携して相乗効果を生み出すような、新たな可能性が感じられる企画となっているか。（テーマ別のみ）
波及性	・事業の成果が、広く市民や他団体に共有することができるようになっているか。 ・市民や他団体が文化芸術活動を始めるきっかけとなるような取り組みとなっているか。
継続性・発展性	・助成金に頼らない継続的な活動が見込めるか。（テーマ別のみ） ・助成事業を通して、将来的に更なる活動の広がりが期待できるか。

■団体助成

評価項目	審査の観点
方向性	・取り組みの趣旨、目的、動機が助成事業のめざす「新潟市内の文化芸術振興に加え文化芸術活動を契機とした地域社会の創造的持続・発展」に資するものか。 ・市民や他団体、地域に好影響をもたらす事業となっているか。
計画性	・事業プラン、スケジュール、実施体制、資金の確保、広報戦略などが具体的かつ適切に計画されているか。 ・資金の確保や使途の妥当性など、現実的な収支予算計画となっているか。
社会性	・団体の設置目的や取り組み目標が社会貢献に適合するものか。
波及性	・取り組みの成果が、広く市民や他団体に共有することができるようになっているか。 ・市民や他団体が文化芸術活動を始めるきっかけとなるような取り組みとなっているか。
継続性・発展性	・取り組みにより、継続した団体運営に繋がっていくことが期待できるか。 ・取り組みを通して、将来的に更なる活動の広がりが期待できるか。

令和7年度文化芸術活動に関する支援事業 取り組みレポート

発行日 2026年3月

編集 大浦 亜子（アーツカウンシル新潟 プログラムオフィサー）
高橋 郁乃（アーツカウンシル新潟 チーフプログラムオフィサー）

写真 採択団体提供（取り組みレポート部分）

発行 アーツカウンシル新潟

公益財団法人 新潟市芸術文化振興財団

〒951-8126 新潟市中央区学校町通1番町12番地 市役所前ビル7階

電話：025-378-4690

FAX：025-378-4663

e-mail：artscouncil@niigata.email.ne.jp

H P：https://artscouncil-niigata.jp

※掲載内容の参照・転載の際には上記までご一報ください。

※令和6年度文化芸術活動に関する支援事業 取り組みレポートは

こちら↓からご覧いただけます。

